

街を行く

第22回 筑波研究学園都市 Tsukubagakuentoshi

都心から思ったより近い筑波で 国家と街を考えた

日本初の研究学園都市として、省庁や大学、企業の研究機関が本格的にここへ集まりはじめた1980年代から、その役割がスタートした茨城県つくば市「筑波研究学園都市」。サイエンスの分野では今や国内外から一目置かれている存在です。

小生自身も驚いているのですが、筑波は今回がはじめての訪問。それまではこの街を「国が整備している都市」、したがって「無味乾燥なところ」というレッテルを貼っていました。でも実際は、意外や意外（関係者や住人の方には甚だ失礼!）で、周囲には住宅街が広がりオシャレな店も多かった。おそらく「つくばエクスプレス」の開通以降都心とのアクセスが良くなって、学研都市に加え東京圏のベッドタウンとしての位置づけを強めたためでしょう。

この街を訪ね、他と比べつつ改めて感じたのは、街は色々な顔を持たなければ発展しないな、ということ。一つのコンセプトを持たせて、それだけを軸に栄えろ、なんて無茶、街が可哀想過ぎますよ。あの手この手で戦略を考えて、それを次から次へ展開していかないとまず発展はムリですし、実際そうしても、なかなか上手くはいかないもの。本連載では、色々な努力をして街おこしをしているケースを取り上げましたが、成果を出せているのはごく一握りです。要するに期間限定でイベント的に打ち出したような街の特色は、真の意味での街の顔・魅力にはなりにくい。イベントは戦術であって戦略ではなく、小手先でない長期展望を持つことが重要なのです。街おこしだけでなく、わが日本は何ごとにも戦略が…それを考えるとイヤに

なってきますね。

でも、遅ればせながら「つくばエクスプレス」開通は、ひとまず戦略の一つして効を奏しています。改めて感じましたが、インフラ整備って街の発展には本当に大事ですよ。以前に訪れた「幕張」や「さいたま新都心」の街も同様、東京近郊の街の

発展は地元自治体だけではどうしようもない、つまりは、国家戦略次第ということです。最近「国破れて山河なし」と政治家が言っていますが、彼は本当の意味を理解しているかはともかく、街には人が住んで生活をしているのですから、真剣に取り組まないと。

いつの間にか話が脱線し、国家を語っていましたが（いつものことですが）つくばと言えばわれわれ世代にとって「東京教育大学」、いまの「筑波大学」。これを語らずしてこの街は語れないでしょう。今回は「キャンパスが半端なく大きいですね、流石!」でおしまい。初訪問のつくばの“顔”にまずはエールを。今後、アクセスが便利になったつくばへは、たびたび足を運び、その変遷を追いかけてから、改めて街を語ることにいたしましょう。



「科学博」の跡。つくばエキスポセンターにそびえ立つHIIロケット。
無味乾燥な街のイメージが、東京圏のベッドタウンとしての潤いがでてきた。

南 一 弘



1982年大学卒業後、三井不動産販売に入社。ローンスター・ジャパン・アクイジションズを経て、2001年エートス・ジャパン・エルエルシーを設立。同代表に就任。2005年4月MID都市開発(旧松下興産)の代表取締役就任。2006年株式会社ジャパン・アセット・アドバイザーズを設立。同代表取締役就任。

BLOG「南一弘の負けない不動産投資」

http://blog.livedoor.jp/minami_kazuhiro